

中国の学校教育における愛国主義教育の変容 ——政治・歴史・語文に見られる価値志向の分析——

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科・外国人研究者) 武 小燕

[要旨]

本稿では、中国の愛国主義教育について、学校教育が持つ国民形成機能の視点から価値観の形成に最も関連する政治・歴史・語文の3科目の教育内容を中学校と高校を中心に分析した。それにより、改革開放期にこれらの科目における価値志向が大きく変容し、総じて階級論とマルクス主義的教養の養成から近代の民族意識形成へと転換していることを明らかにした。こうした変化は改革開放という近代化路線の下で政府の「上からの政策」だけではなく、民間の「下からの要請」も反映しながら、中国社会の変化に対応して進められてきたと考えられる。

I. はじめに

2000年代半ば以降、中国の愛国主義教育は日本で大きな関心を集めてきた。しかし、その議論のほとんどは、江沢民以降展開されてきた愛国主義教育キャンペーンに集中し、特にその中の日本の扱いが焦点となっている⁽¹⁾。こうした視点の下で、中国の愛国主義教育を反日教育とみなす見方が世論をリードし、日本社会に広く浸透している。この反日教育論に対し、中国人研究者の間からはいわゆる親日家を含めて例外なく否定的な見解が出されており、愛国主義教育の展開はむしろ近代中国の歴史と現状に対応して行われているものだと主張されている⁽²⁾。反日教育論か否かについては相互の認識が分かれる一方、双方の議論からは、1990年代以降国民統合のイデオロギーとして社会主義が後退するにつれ、愛国主義がその重要性を増してきたという一致した認識もうかがえる。また一部の研究者からは、この時期の愛国心の高揚は単に政府が誘導した結果なのではなく、政治的束縛の緩和から発生した民衆運動としての側面もあり、民族的アイデンティティを追求するこの運動が持つナショナリスティックな性格がそこには

反映されているとの指摘もなされている⁽³⁾。

以上の先行研究は、いずれも主として政策的・社会的な視点から愛国主義教育を検討している。他方、それが教育政策として展開されているにもかかわらず、教育の視点からなされた分析は非常に少ない。例外的に歴史教科書を取り上げる研究が一部存在するが、そこでの関心は日中戦争の記述に集中し、愛国主義教育そのものの分析というよりも、反日教育が実際に行われているか否かの検証に重きが置かれているのは明らかである⁽⁴⁾。

そもそも愛国心を教える教育活動は世界各国で近代国家の成立に伴って展開され、その様相に相違があるものの、国民形成過程で重要な役割が発揮または期待されてきたことに大差はない。そして他の諸国と同じように中国でも、特に政治・歴史・語文（日本の国語科にあたる）の3教科が重視され、愛国主義教育の要素が多く取り入れられている。それらが果たした役割については、2004年に上海の中学・高校生を対象に行われたアンケート調査で、9割以上の生徒が、自らのナショナル・アイデンティティの形成に最も影響を与える科目として政治・歴史・語文のいずれかを選んだことにも表れている⁽⁵⁾。

本稿では、反日教育か否かといった視点ではなく、今日の中国で具体的にどのような愛国心が求められているのかを捉えるべく、これまで不十分だった教育の視点からの愛国主義教育の分析を行う。この作業は、国民国家としての中国の性格を捉え直す意味を持つだろう。

具体的には、改革開放以降の教育改革と社会的背景を踏まえつつ、上記3科目の教学大綱ならびに課程基準⁽⁶⁾（日本の学習指導要領にあたる）と教科書を分析対象とする。また先行研究は特に90年代の江沢民期に注目してきたのに対し、本研究では70年代末以降の改革開放期にまで視野を拡大する。それは、江沢民期の諸政策もその前後の政策の一部として捉えることで、愛国主義教育の変容をより良く捉えることができると考えられるためである。

Ⅱ. 改革開放期の社会変容と教育改革

改革開放期の学校教育は、文化大革命（以下、文革）で行き過ぎた政治運動を是正し、学校秩序の回復と知育を重視する課程編成を特徴としている。とはいえ、「運動論」から「教育論」への転換を試みる学校の変化は相対的なものであり、マルクス主義の習得が相変わらず学校教育の一義的な目標であった。むしろ「正しい」マルクス主義の学習によって文革の誤りを是正し、文革後に高まった社会主義不信の風潮に歯止めをかけるよう、政府は社会主義教育の徹底を指示した⁽⁷⁾。

社会秩序の回復とマルクス主義イデオロギーによる社会統合が進められる一方で、経済発展が急がれ、1985年にはマンパワーポリシーとしての教育改革が始まった。それは同時に社会主義体制に奉仕する教育の役割を強調しながらも、ドグマチックな教育から「近代化・世界・未来に向けた」教育への転換を図る一大改革であった⁽⁸⁾。具体的には、トップダウン型の教育体制からボトムアップ型の教育体制へ、国定教科書制度から検定教科

書制度へ、全国画一の教育内容から一定の地域性と柔軟性のある多様な教育内容への転換が進められた。教育理念の面では、特に時代に対応する姿勢・態度の養成が重視され、階級闘争の意識よりも社会の発展に努め、思考力と変革力を持つ人材の育成が強調されるようになった。

こうした改革の傾向は、1992年に市場経済路線が唱えられて以降いっそうの展開を見せる。中国共産党中央委員会（以下、中共中央）と国務院によって公布され、それぞれ90年代と2000年代の教育改革の方向性を規定した「中国教育改革と発展に関する綱要」（1993年）と「教育改革の深化と素質教育の全面的推進に関する決定」（1999年）は、いずれも社会の市場化とグローバル化に対応する形で教育の多様化と近代精神の育成を進め、権威主義的な受験教育から生徒の自発性・主体性を尊重する素質教育への転換を図るものであった。現実には、教育改革の中で幾度も行われた教学大綱・課程基準の改正と新しい教科書では、一貫してマルクス主義や階級闘争といった内容の削減と、法や経済の知識と自立心や変革力のような社会の変化に対応する内容の拡充が見られる。

他方、教育の多様化が進むのにあわせて、国民統合の原理は次第に一元的な社会主義からより多様な価値観を許容する愛国主義へと変化してきた。80年代にはより広範な人々の共感を喚起し、政治的立場の違いを超えて共に改革開放を進めるように、愛国主義教育政策が党のイデオロギー管轄機構である中国共産党中央宣伝部（以下、中宣部）等に提唱されていた⁽⁹⁾。その中でまず国の近代化に尽力する愛国者になることが望まれ、その次は「愛国者の自覚を共産主義思想のレベルまで高めていく」ことが目指された。そして、1989年の天安門事件と世界規模での冷戦体制の終焉の下で、社会主義よりも愛国主義イデオロギーの有効性が政府により明確に認識され、第一義的に提唱されるようになった。

この時点で総書記に就任した江沢民は愛国主義教育の強化を繰り返し強調し、1991年に国家教育委員会（現：教育部。以下、国家教委）に中国近現代史と国勢に関する教育の充実という具体的な指示を出すに至った⁽¹⁰⁾。それを受けて国家教委は「五千年の燦爛たる中華文明」と「近代百年余りの間に強いられた侵略の屈辱と救国運動」に関する教育を重視する方針を打ち出し、伝統文化と中華民族の視点をもって学校教育に取り組む姿勢を強めた⁽¹¹⁾。

そして市場経済路線の開始以降、経済の自由化と社会の多様化が加速するなか、1994年に中共中央は「愛国主義教育実施綱要」を公布し、形式的な宣伝に止まりかねない愛国主義教育の具現化を図り、市場経済の下で国民が一致団結して国の発展に尽くすよう呼びかけた。具体的には、中国の文化や中国共産党の歴史を反映する遺産や施設などを愛国主義教育基地として指定し、そこへの見学活動を奨励するほか、学校教育やマスメディアにおける愛国主義教育の内容の充実を求めた。これらの活動は体制維持の意図を含めながらも、経済発展に貢献し、社会の近代化に対応する姿勢や観念の育成が特に強調されている⁽¹²⁾。また、この政策を前記の80年代の愛国主義教育政策と比べると、最終的な教育目標が共産主義者の育成から近代化の担い手の育成へと変化したことが確認される。

さらに、90年代後半には市場経済の浸透による近代的市民社会の登場にともない、具体的な秩序の構築という視点から個人と国家または社会との関係を捉え直し、社会の変化と国民統合の課題に取り組む必要性が高まった⁽¹³⁾。また2000年代以降WTO加盟に伴うグローバル化が加速する下で、ボーダーレス化に対抗するナショナル・アイデンティティの維持という課題もますます社会的な関心事となった。

「公民道德建設実施綱要」（2001年、中共中央）と「小中高校において民族精神を発揚・育成する

教育の展開に関する実施綱要」（2004年、中宣部・教育部）は、これらの課題に対して望ましい国民像を提示するものとなった。それらの中では、いずれも愛国精神の育成を中心としながら、その下で近代化と民族精神に関する教育の充実が求められている。

共産主義志向の愛国主義教育から近代化と民族主義志向の愛国主義教育への転換が可能となったのは、中国共産党自身の変容と不可分な関係にある。とりわけ、2000年に江沢民が提起した「三つの代表」論と後に行われた党規約の修正は大きな意味を持っていた⁽¹⁴⁾。つまり、それらによって共産党は実質的に階級政党から国民政党へと変貌し、プロレタリアートだけでなく中華民族全体の代表者となることを図ったのである⁽¹⁵⁾。

ここまでは、「上からの政策」の視点から改革開放期における教育の変革を捉えてきた。しかし、ボトムアップ型を目指す教育改革では、「下からの要請」も大きな影響力を持っている。その影響については、以下の各教科の分析の中で考察していきたい。なお、検定教科書制度の発足と教育改革先行地域の指定によって、現在、中国全土に多数の教学大綱・課程基準と多様な教科書が存在しているが、本稿では、最も代表的な教育部による学習指導要領と人民教育出版社の教科書を分析対象とする。

Ⅲ. 政治科：社会主義教育から公民教育へ

政治科は中国の各教育段階で設けられている科目である。その内容は政治理念、人生の価値観、社会道德など、人間と社会のあり方に関する根本的な規範を扱っており、長い間、共産党のイデオロギー教育の場であった。そもそも、この科目は共産党にとって望ましい人間像の育成のために設けられたのであり、教育部のほか、中共中央と中宣部がその教育内容に直接関与してきた。それゆえ政治科は「上からの政策」がもっとも浸透して

表 1 中学校と高校の政治科における主な教育内容の変容

主な教育内容		1980 年代	1990 年代	2000 年代
1	愛国心、友愛や誠実などの道徳教育	○	○	○
2	共産主義的道徳の養成	○		
3	マルクス主義の歴史発展段階論	○	○	
4	マルクス主義経済学の基本観点	○		
5	マルクス主義政治学の基本観点	○		
6	マルクス主義哲学の基本観点	○	○	○
7	中国の経済制度・政治制度・対外政策	○	○	○
8	税や金融など経済学の知識、市場経済への認識		○	○
9	遵法精神の樹立、民主性の観点		○	○
10	心身の発達と個性の発展、思春期教育		○	○
11	伝統文化の継承と民族精神の育成			○
12	権利や市民性に関する主権者教育・社会参加			○
13	グローバル化の情勢、国際的視野の養成			○

注：1982 年，96－97 年，2003－04 年に公布された政治科の教学大綱・課程基準に基づいて筆者が作成。

いる科目であり，その趣旨が改革開放期にマルクス主義の習得から公民的素質の養成へと変化したことは，政府の姿勢転換を示すものとも言える。

80年代初期，小学校では新設の「思想品德」，中学校と高校では「思想政治」^⑩という科目のもとで，共産主義的道徳とマルクス主義の理論を中心とする社会主義教育が展開された。そして教育改革が始まると，中共中央は政治科の改善に関する指示を出し，他の科目よりも一段の緊迫感をもってそれに取り組むよう求めた^⑪。こうして80年代後半には，日常生活における模範的行為，法知識，思春期教育など青少年の発達と身近な課題に関する内容がはじめて教科書に取り入れられることになった。

90年代に入ると，上記の内容はいっそう充実し，やがて政治科の教育目標そのものが改正されるに至った。すなわち，従来の教育目標はもっぱらマルクス主義的教養の習得にあったが，1996年に公布された教学大綱では公民的素質の養成がその一義的な目的とされ，市場経済の現状に相応しい社会認識と価値形成を中心とする公民教育が求

められた。さらに2000年代以降，人文性^⑫もその教育目標に加えられ，小学校の「思想品德」は「品德と生活」（小1－2）と「品德と社会」（小3－6）に，中学校の「思想政治」は「思想品德」へと科目名が変わり，政治イデオロギーのプロパガンダ的性格は薄まった。

その内容構成の変容は，表1のようにまとめられる。すなわち，80年代初頭の時点では，マルクス主義に関する学習内容が圧倒的に多く，共産主義志向の教育がなされていたのに対し，90年代に入ると市場経済に関する内容が増え，2000年以降はグローバルゼーションへの対応が主な関心事となっている。今日，小中学校の教育課程はいずれも自分，他人との関わり，社会・国・世界との関わりという同心円的な構造で生徒の自己認識と社会認識の育成を図るものとなっており，マルクス主義の内容は教科書からすっかり姿を消した。高校では「政治」，「経済」，「文化」，「生活と哲学」の4つの必修分野のほか，国家と国際組織などの選択分野が設けられ，グローバル化する現代社会の課題が意識されている。また，いずれの教育段

階でも、民族文化などナショナル・アイデンティティの形成を図る内容が増えている。

なお、政治科の変化を象徴的に示すものとして、「公民」という言葉の登場とその意味の変容が挙げられる。

「公民」という言葉が政治科で登場したのは、1980年代後半のことである¹⁹⁾。それまでは、プロレタリアを意味する「人民」が用いられてきたが、それに対して「公民」は国民を意味する言葉としてそれに取って代わった。90年代の市場経済期になると、「公民」は国民のほか、遵法精神、環境意識、命の尊重、消費観念などの資質を備える近代的人間像として理解されるに至り、同時にその追求が進められてきた。そして2000年代には、さらに権利意識や国内外の情勢に対する関心や、社会参加の意識も「公民」が持つべきものとして求められるようになった²⁰⁾。

今日、「公民」に対する最も影響力のある理解としては、中山大学の李萍と鐘明華の見解が挙げられる。彼らが2002年に発表した「公民教育——伝統的徳育の歴史的な転換」は、多くの教育者に引用されている²¹⁾。その中で、公民とは、生まれたままの「私民」(自然人)とも、従属的な「臣民」とも、また国籍の所属を意味する「国民」とも、階級的立場を持つ「人民」とも区別されなければならないとされている。また公民教育は、国や社会に服従し、高尚な道徳を備えた聖人を育てようとする従来の政治教育と異なり、人々の独立した人格を認める主体性教育であり、社会契約に基づく権利と義務を所有し、遵法精神を持つ市民を育てる教育であるべきだという。

これは、従来のイデオロギー教育としての政治教育と決別し、いわゆるシティズンシップ教育を主張するものと言えよう。

Ⅲ. 歴史科：革命史観から文明史観へ

新中国の歴史教育は、長いあいだ民衆の革命と

闘争こそが歴史の進歩をもたらす原動力であるとする唯物史論に支配されてきた。実際に、歴史教科書には革命と闘争がふんだんに取り入れられ、かつその役割と影響が重視されてきた。しかし、「革命史観」と呼ばれるこのような歴史認識は、改革開放後、次第に封建王朝やブルジョアジーの進歩性も評価し、文明の発達という視点で歴史を捉える「文明史観」と呼ばれる認識にとって代わられてきた。

80年代に、革命史観がまだ支配的な位置を占めるなか、相対的に自由な検討が認められていた史学界に階級対立以外の観点から歴史を捉えなおす動きが現れた。たとえば、最も関心が集まったアヘン戦争から五四運動までの中国近代史について、太平天国運動・義和団事変・辛亥革命という三つの革命的な出来事の意義を高く評価する革命史観に対し、洋務運動や戊戌変法の重要性を認め、資本主義の発展がもたらした社会の進歩と民族意識の覚醒の方を評価する意見が出された²²⁾。

90年代に入ると、羅榮渠による近代化研究の成果と費孝通による「中華民族多元一体論」の提起をはじめとし、近代化の進歩性と中華民族共同体の視点から歴史を見直す議論がますます活発になる²³⁾。革命史観で負の意義しか認められなかった出来事についても積極的な評価が聞かれるようになり、アヘン戦争は「中国と世界のつながりを緊密なものにし」、戊戌変法を起こした王朝統治者らは「中国を近代文明国に変えようとする」進歩的な政治勢力だといった論調が登場している²⁴⁾。また、90年代に入ると、新儒学²⁵⁾の影響力が回復するなかで、社会主義の立場から封建的と批判されてきた伝統文化に対する人々の関心が顕在化し、特に90年代後半の社会的な「国学ブーム」を迎えるに至った。こうして、社会の発展を重んずる「近代化」の視点と、ナショナル・アイデンティティを追求する「民族意識」の視点が次第に史学界の中の閉じられた議論からより広範な人々の

表 2 中学校と高校の歴史科で求められる価値の変容

主な教育目標（価値志向・姿勢・態度の面）		1980 年代	90 年代前半	90 年代後半	2000 年代
1	人民への愛情、革命者と英雄に見習う姿勢	○			
2	史的唯物論の観点、プロレタリア国際主義	○	○		
3	共産主義への奉仕、社会主義への愛情	○	○	○	
4	愛国心、社会の近代化を進める姿勢	○	○	○	○
5	人類の平和と進歩に奉仕する姿勢		○	○	○
6	国勢に関する理解の増進		○	○	○
7	中華民族の伝統的美徳・民族的誇り			○	○
8	改革・開放を進め、国際的活動と競争に参加する意識の向上			○	
9	民族間団結と国家統一の意識			○	
10	健全な人格と健康的な審美観の形成			○	○
11	伝統文化の継承と民族精神の発揚				○
12	ヒューマニズムへの理解の増進と進取の気性・科学的な態度の育成				○
13	民主的な観点と法の意識の形成				○
14	各国の文化と伝統の尊重、開かれた国際意識の形成				○

注：1980 年，1990－92 年，1996－2000 年，2003－04 年に公布された歴史科の教学大綱・課程基準に基づいて筆者が作成。

関心を獲得するようになった。

さらに2000年代以降、民間だけではなく、政府も孔子の名前を冠した中国語と中国文化の教育機関である孔子学院や欧米先進国の近代史を肯定的に捉えるテレビドキュメンタリーの「大国崛起」などのプロジェクトに取り組むようになった²⁶⁾。そこで示された新たな歴史認識は、伝統文化や資本主義の価値を積極的に評価するものであり、革命史観から文明史観へと変容する歴史教育の転換に拍車をかけた。

こうした転換を示す最も顕著な変化は、学習内容における革命的事件の減少と文化史・経済史の充実に見られる。例えば、中国古代史において、中学校で習得すべき農民革命については、1980年の教学大綱では26件が載せられたが、1992年の教学大綱では5件に、さらに2001年の課程基準では1件にまで減少した。それに対し、文化史については、中学校の中国史を例にとると、それが全体で占める割合は80年代初期の時点では10.6%だったのに対し、90年代には23.7%にまで増えている²⁷⁾。また2000年以後、近代社会における衣食住や交通・メディアの変化も教科書に取り入れられ、より豊

かな歴史認識が求められるに至った²⁸⁾。そのほか世界史でも、教科書に登場する人物のなかで労働指導者・革命英雄が減少し、人文学者・科学者が増加した²⁹⁾。

歴史科の教育目標については、1980年の教学大綱では唯物史観を習得することが求められていたが、1996年の教学大綱では愛国心の養成が、2003－04年の課程基準では人文的資質の形成が求められるに至った。また教育内容の構成についても、王朝史と編年史のスタイルは過去のものとなる。2000年代に、中学校の教科書は中華文明の起源・発達を軸にまとめられ、高校の教科書は中国史と世界史を融合した人類の政治史・経済史・文化史などのテーマ史に再編され、「文明」を軸に歴史を再解釈する姿勢が強まった。こうして、かつて革命と闘争の出来事に埋め尽くされた歴史教科書は、中国のみならず人類の文明を振り返る教材に向けて大きく変わった。

改革開放以降の歴史教育で求められる様々な価値は表2のようにまとめられる。

歴史教育で起きた変化を、いくつかの具体例を手掛かりに確認してみよう³⁰⁾。

まずは洋務運動である。19世紀後半、清王朝の高級官僚の下で西洋技術の導入によって軍事工業の発展を求めようとしたこの運動には、封建的統治の維持、資本主義勢力の発展、富国強兵への熱望、近代化の契機など多様な側面が混じっている。それゆえ、その評価をめぐっては、革命史観と文明史観の間に大きな隔たりがあった。革命史観は、それを封建社会の統治者たちが自分の統治を延命させるための措置と位置づけて批判する姿勢が強いのに対し、文明史観ではそれを近代化の発端と位置づけ、高く評価する傾向がある。

実際に80年代の歴史教科書は、「中国資本主義の登場」というテーマの下で、それと資本主義の結びつきを強調していた。それに対して90年代には「清の政局の変動と洋務運動」というテーマの下に置かれ、その記述ではイデオロギー的色彩が薄められている。さらに2000年代の教科書は、「近代化の探求」というテーマの下でそれを「中国近代化の道を開いた」と高く評価するようになった。

次に、孔子に関する記述である。孔子は古代中国の代表的な人物であり、伝統文化のシンボルとも言える存在である。しかし、暴力革命と農民闘争を称える革命史観の下では、孔子は封建社会の代弁者と見なされ、その主張は封建社会の統治者のための懐柔策だと批判されてきた。たとえば孔子の主張である「仁」について、80年代初期の教科書ではそれが「階級対立を緩和するために」提唱されたものであり、結局「封建制度を維持し、人々を統治する精神的な道具となった」と強く批判されていた。

それに対し、文化性と民族性を重視する文明史観の下で、こうした批判は次第に評価へと転じていく。90年代初期の教科書は、「仁」は「苛酷な政治と恣意的な処刑に反対する」ために提起されたとし、孔子の学説は「後世に多大な影響を与えた」と書かれている。さらに2000年代には、孔子の学説は「中国の伝統文化で重要な地位を占め」

ると認められ、「その『仁』にはすべての美德が含まれている」と称賛されるまでに至った。伝統文化に対する捉え方が、封建的で批判すべき対象から中華文明を育んだ大切な財産としての評価へと転換したことが、こうした孔子に関する記述からも顕著に捉えられよう。

最後に、教科書における日中戦争の記述にも目を向けてみよう。

この戦争は80年代までの革命史観のもとでは、共産党と国民党の対立を軸に叙述されていた。共産党に対する国民党の襲撃とそれに対する共産党の反攻、そして国民党による統治に対する批判が、多くの紙幅を占めていたのである。そこで示されたのは、日中間の対立というよりも、むしろプロレタリア勢力とブルジョア勢力の戦いであり、戦勝の意義は帝国主義の打倒という点に認められ、殲滅した敵兵の数まで誇らしげに掲げられていた。しかし、90年代に入ると、こうしたプロレタリア革命の視点は民族革命へと一転した。国民党による抗日戦や国共合作に関する記述が増え、日本軍による暴力行為とそれが中国人民にもたらした被害も詳述されるに至った。また戦勝の意義は、帝国主義打倒よりも「中華民族」の勝利に認められるようになった。

他方、2000年代以降は、国民党への評価がさらに客観化し、全国民が一致団結して抗日戦に協力した姿勢がより積極的に打ち出されただけでなく、日本軍の暴行に関する記述は大いに減り、内容は全体的に簡素化された。また出版社によっては、日本の原爆を取り入れ、「20万人の平和的な住民の死傷をもたらした」と戦争の悲惨さを訴える教科書の記述も見られる³¹⁾。

以上の3つの事例は、それぞれ近代化、伝統文化、民族意識の側面から歴史教育で生じた認識の変化を反映するものである。その中には、民族と文化に対する過度な評価にともなうナショナリズムの台頭が懸念される部分もあるが、全体的には

革命史観から文明史観への変容により、階級論にこだわらないより豊かな歴史認識が提供されるに至ったことが確認できよう。

IV. 語文科：コミュニズムからヒューマニズムへ

日本の国語科に相当する語文科⁸³は、中国の学校では単なる言語教育と文学教育の科目ではなく、国民教育の基礎と位置づけられ、価値観形成がその当然の役割とされている。こうした期待は、「文を以て道を載せる」という儒教文化の伝統を受け継ぐものでもある。

改革開放期に、語文教育に関して下から上がってきた要請は、何よりもそれを政治教育の束縛と権威主義的な教授法から解放し、人間中心の視点から教授法と教科書内容の改善を求めるものであった。こうした声は、1987年に語文科教師の陳鐘梁⁸⁴から初めて上がり、一定の関心を集めたが、本格的な議論が展開されたのは90年代であった。1993年に若手研究者の韓軍は「科学主義を制限し、人文精神を発揚せよ」という論文を発表し、語文教育の目的は、政治的な人間ではなく人文性の育成にあることを初めて明確に訴えた⁸⁵。文学界よりも率先して出された人文精神の主張は大きな反響を呼び、言論界で人文主義に関する熱い議論が展開された⁸⁶。

人文主義への関心が高まるなか、1997年に『北京文学』第11号は「中国語文教育への憂慮」という特集を組み、人文学者、語文教師、小学生の子を持つ親の3者による語文教育の現状を批判する文章を掲載した⁸⁷。その批判は、未だにプロパガンダ的な作品に満ちた教科書と受験勉強中心の硬直した教授法への不満であり、豊かな人間性と活発な創造性を育む語文教育を求めるものであった。ローカルな文学誌に掲載されたこれらの文章は、直ちに全国紙の『中国青年報』などに転載され、人々の共感を呼び、瞬く間に社会的な関心事となった。後に執筆者の一人が語文教育改革の政府会

議に呼ばれたことに象徴されるように、こうした世論は語文教育改革を推進する大きな力となった。

語文教育の改革は、このような社会の要請を反映しながら、基本的に政治性の薄まりと人文性の強化を軸に展開されてきた。たとえば語文科の働きについては、1980年の教学大綱では語学力の専門性と社会主義の思想性の両方において重要性を持つとされていたが、1996年の高校教学大綱は、「語文は文化の一部」とであると認め、「民族の優秀な文化と人類の進歩した文化」の習得に大きな意義があるとの認識を示した。また2000年の高校課程基準では、「文学作品が全体の60%を占めてよい」とされ、かつての政治性を重視し、プロレタリア文学を中心とした作品構成は、人文性・芸術性に基づく構成へと大きく変わった。

実際に教科書に取り入れられた作品からは、表3が示すように、政治イデオロギー的なテーマの減少と人文的な思考・価値観を反映するテーマの増加が見られる。80年代初期に最も多く扱われた「政治・革命」類の作品は、2000年代に最も分量の少ないものとなった一方、「自然・生命」類の作品は、80年代の4.9%から2000年代の19.6%にまで増加した。

さらに、同じカテゴリーに分類されていても、理念の変容が見られる。たとえば、90年代の教科書で語られた「理想」とは、国の発展に尽力し、共産主義の実現を追求しようと呼びかけたものであった⁸⁸。それに対し、2000年代の教科書において、理想については「理想は石であり、火花をたたき出す。理想は火であり、消えた灯りを点す。理想は灯りであり、夜行の道を照らす。理想は道であり、黎明まで導いてくれる……」と語り、人々の心に潜んでいる優しい光のような希望がテーマとなっている⁸⁹。

実際に教科書に取り入れられた作品を高校の教科書を例にとって確認しよう。

まず90年代までの教科書では共産党指導者の作

表 3 改革開放以降中学高校語文教科書における作品のテーマの分類統計

時代	80年代初期			90年代初期			2000年代初期		
教科書	(82年版中学・高校)			(92年版中学・90年版高校)			(01年版7-9, 2000年版高校)		
分類	数量	割合 (%)	順位	数量	割合 (%)	順位	数量	割合 (%)	順位
政治・革命	95	31.0	1	68	17.9	2	8	3.0	10
人生・社会	68	22.2	2	62	16.3	3	56	21.1	1
哲理・情緒	34	11.1	3	76	20.0	1	45	17.0	3
国家・民族	15	4.9	6	22	5.8	6	19	7.2	6
科学・知識	21	6.9	5	46	12.1	4	16	6.0	7
文学・芸術	9	2.9	9	20	5.3	7	22	8.3	5
歴史・文化	7	2.3	10	18	4.7	9	13	4.9	8
自然・生命	15	4.9	6	34	8.9	5	52	19.6	2
人物・事件	27	8.8	4	20	5.3	7	25	9.4	4
その他	15	4.9	6	14	3.7	10	9	3.4	9
総計	306	100.0	—	380	100.0	—	265	100.0	—

出所：楊孝如「1977年以来中学語文教科書対課文解読的影響論析」『寧波大学学报（教育科学版）』第27巻第1期，2005年2月，p.110（なお2000年代の分析対象については，01年版7～9学年の教科書のデータは7学年の上・下と8学年の上のみである）。

品が多く取り上げられていたが，それらは2000年代以降大いに減り，現在では毛沢東の詩一篇しか掲載されていない。また中国の近代文学については，左派作家と位置付けられた魯迅の作品が多数採用されていたが，2000年代以降，ロマン主義作家の郁達夫（「古都の秋」）や中国郷土文学の父と呼ばれる沈從文（「辺城」），自由主義代表者の胡適（「私の母親」）といった左派作家以外の作品，さらに国民党政府体制内の要人である蔡元培の作品（「北京大学校長の就任演説」）も登場するようになった。

90年代までの教科書で多く取り入れられていたもう一つの作品群は，50年代から60年代までのプロレタリア文芸路線のもとで書かれた，革命の英雄や共産党の功績，または社会主義建設の成果を称えるものである。「誰が最も愛しい人か」（抗美援朝の戦地ルポ），「六十一人の階級的兄弟のために」（食品中毒の労働者の救助事件），「靈官峽の夜行」（鉄道工事に奮闘する労働者の賛歌）などが挙げられる。

しかし，2000年代の教科書になると，このようなプロパガンダ的な作品は姿を消し，中国文化の美的感受性または人間や動物への愛情に満ちたヒューマニスティックな作品が増えてきた。たとえば淡い哀愁を帯びた愛情を描く「雨巷」（象徴主義詩人戴望舒の代表作），ロマンチックな思いにひたりながら別れの感傷と美しい風景を語る「康橋と再び別れる」（「再別康橋」，ロマン主義詩人徐志摩の代表作），また文革中に処分せざるを得なかったペットへの追憶とお詫びの心情を語る文章「ワンコの思い出」（「小狗包弟」，中国文壇の重鎮である巴金の回想録）などが挙げられる。

また，2000年代には台湾作家の作品が多く登場するようになった。幼少時における父の死を偲ぶ林海音の「父の花が萎れた」（「爸爸的花兒落了」），家族と故郷への想いを語る余光中の「郷愁」（詩），中華民族の概念を提起した梁啓超³⁹⁾の講演を記念する梁実秋の「梁任公先生の講演の思い出」（「記梁任公先生的一次演講」）などである。こうした台湾作家の作品では，政治的なプロパガンダを超

表 4 中学校と高校の語文科で求められる価値志向の変容

主な教育目標（価値志向面）		1980年代	1990年代	2000年代
1	プロレタリア的な情操	○		
2	共産主義的道德	○		
3	社会主義的思想・品性	○	○	
4	健康的で高尚な審美観		○	
5	愛国主義の精神		○	○
6	個性や特長の発展，健全な人格の形成		○	○
7	中華民族の伝統文化への愛情		○	○
8	想像力と創造力の育成			○
9	積極的な姿勢や正しい価値観の形成			○
10	現代社会の文化と生活に関心を持つ			○
11	文化の多様性の尊重，人類の文化の継承			○
12	理性的な態度の養成			○
13	芸術と科学技術における美の感受			○
14	民族振興の使命感と社会的責任感の増強			○

注：1980年，1992－96年，2003－04年に公布された語文科の教学大綱・課程基準に基づいて筆者が作成。

えて共通する文化的感受性や民族的アイデンティティを追求する姿勢が顕著である。

外国の作品については，90年代まで資本主義批判の役割を担い，資本主義社会の貧困と資本階級の冷酷さや貪欲さを批判するものが圧倒的であった⁴⁰。具体的には，ハイネの「シレジアの織工」，チャーホフの「カメレオン」，バルザックの「守銭奴」などが採用されていた。それに対し，2000年代の教科書ではそれらの作品はほとんど人文主義の趣旨を反映する作品に取り替えられた。ヘミングウェイの『老人と海』やエーリッヒ・フロムの『愛するということ』の抜粋，マリー・キュリーの「私の信念」，また，アメリカのピューリッツァー賞の受賞記事である「アウシュヴィッツにニュースはない」など，個人の奮闘する姿勢や自由の追求，人生への愛や希望，平和の祈念といった趣旨の作品が多数採用されるようになった。なお，自然科学に関する啓蒙的な文章も増えている。資本主義批判の役割を持っていた外国作品は，次第に普遍的な人文性と科学性に関する認識を促す機能を果たすようになった。

語文教育の教育目標の変容は，こうした作品の変化に共通するものである。表4に示すように，80年代の語文教育では共産主義者の育成が図られていたが，90年代に個人の発達と民族文化への愛情が要求され，2000年代にはより広い視野からの人類文化への関心と理性的な態度が要請されるに至った。

このように，改革開放以降高まった人間本位への関心という大きな社会的背景の下で， Kommunismus を目標とし，政治的なイデオロギー教育をなした語文教育は，次第にヒューマンズムを追求し，感受性と人文性を重視する文化的なものに変容してきた。

V. おわりに

上述した政治・歴史・語文の3科目で起きた教育内容と価値志向の変化が，改革開放という近代化路線に対応して生まれたのは明らかである。この路線は，かつての政治運動と全面的な統制体制に決別し，中国社会に二重の意味の近代化運動をもたらしている。一つは，先進国を追いかけ，追

い越しを図る運動であり、もう一つは、自らのアイデンティティを再確認する運動である。前者はイデオロギー論を後回しとしながら、それまで敵視していた資本主義国を模倣する姿勢に見られ、後者は中華民族共同体を国民統合の新しい原理とする動きに顕著である。愛国主義教育は、まさにこうした文脈の中で社会主義イデオロギーに代わるものとして注目、重視されるに至った。

現実に学校の各教科で求められる国民形成のための基本的価値は、80年代初期のプロレタリア的自覚・マルクス主義的教養から、次第に民族的・文化的な意識へと転換してきた。この過程では、世界に自らを開く近代化志向と独自の文化に拘る民族志向のあいだでジレンマが生じるだけでなく、グローバリゼーションに直面するからこそ民族的アイデンティティの自覚が強められ、そして民族文化を振り返ることによって他文化との共通性を見出そうとする、もう一つのねじれた現象も存在している。2000年代以降、各教科において民族性とグローバリゼーションへの関心がともに充実していることがそれを物語る。そして愛国主義教育は、これらのジレンマまたはねじれた現象の調和を図るように進められているように考えられる。すなわち、排他的なナショナリズムでも理想主義的なコスモポリタニズムでもなく、むしろナショナル・アイデンティティの獲得を求めながら、自国を相対的にも見る市民性そして自民族を相対化する人類への関心が志向されているのである。

もっとも、中国の学校教育が理性的な愛国心を育てようとしているとしても、そこに潜む負の側面に対する注意は必ずしも十分とは言えない。専制政治の克服と階級論に拠らない民族的アイデンティティの追求のために、愛国心をもって社会統制を図りながら、それを社会変革のエネルギーとして重視する姿勢が90年代以降強くうかがえるが、こうした政策が近代化運動の中で高揚する民族意識と相乗してナショナリズムを暴走させる危

険もないとは言えない。学校教育は、この問題により意識的に取り組むことが必要であろう。

[注]

- (1)矢吹晋「中国の『反日感情』と日中関係（含意見交換）」『公研』42（10），2004年10月，pp.56-90，石田収「中国の愛国主義教育と反日の関係」『問題と研究』34（6），2005年3月，pp.32-45，飯塚敏夫「中国の愛国主義教育とは何だったのか——『反日感情は愛国主義教育が原因ではない』のか——」『現代中国事情』No.24，2009年3月5日，pp.51-81など。
- (2)王敏『中国人の愛国心』PHP研究所，2005年。また、「対日新思考」を主張した一人の時殷弘は反日感情の高まりが愛国主義教育によるというのは事実にはそぐわないと主張し（「日中関係，改善策は，両国の研究者2人に聞く」『朝日新聞』2004年8月31日），在日研究者の朱建榮も愛国主義教育がイコール反日教育であるとする見方に否定的な意見を述べている（「隣人の見るニッポン（上）」『中日新聞』2004年10月26日夕刊）。
- (3)加々美光行「ポスト冷戦と日中ナショナリズムのゆくえ——いかに連帯を再生させるか」『論座』No.114，2004年11月，pp.206-215，田島英一「『愛国主義』時代の日中関係——『中国』という文脈における歴史認識とアイデンティティ」『国際問題』No.549，2005年12月，pp.46-61など。
- (4)王智新「中国の歴史教育と歴史教科書——『反日』教育は事実か」『季刊中国』2005年春季号，pp.19-38。王雪萍「中国の教科書から見る分断した日本像と日中関係」『東亜』No.466，2006年4月，pp.72-81。
- (5)365人の中学生・高校生に対して行われたこのアンケート調査では，中学生では政治37.8%，語文35.1%，歴史21.1%，高校生では語文31.7%，政治30.6%，歴史30.0%の選択率となつて

- いる。蔡旭群・夏志芳「上海市民族精神教育現狀調查研究」『上海教育科研』2005年第11期, pp.32-35。
- (6)新中国成立から1990年代までは、学校教育の各教科の趣旨・内容を規定するものとして「教学大綱」が公布されていたが、2000年代に行われたカリキュラム改革では、柔軟性が高く手引き的な性質を持つ「課程基準」に変わった。
- (7)「全国中小学思想政治教育工作会议纪要(1979年9月5日)」課程教材研究所編『20世紀中国中小学課程標準・教学大綱匯編：思想政治卷』人民教育出版社, 2001年, pp.228-233。
- (8)「中共中央關於教育体制改革的決定(1985年5月27日)」何東昌監修『中華人民共和國重要教育文獻(1949年-1997年)』海南出版社, 1998年, pp.2285-2289。
- (9)「中共中央宣傳部, 中共中央書記處研究室關於加強愛國主義宣傳教育的意見(1983年7月2日)」前掲『中華人民共和國重要教育文獻(1949年-1997年)』 pp.2107-2110。
- (10)「江沢民総書記致信李鉄映何東昌強調進行中国近代史現代史及国情教育」課程教材研究所編『20世紀中国中小学課程標準・教学大綱匯編：歴史卷』人民教育出版社, 2001年, pp.607-608。
- (11)「中小学加強中国近代, 現代史及国情教育的總体綱要」前掲『20世紀中国中小学課程標準・教学大綱匯編：歴史卷』 pp.611-636。
- (12)たとえば、愛國主義教育基地への見学活動は、後に「赤色旅行」と呼ばれ、その経済効果が注目された。2004年と2008年に政府が2度公布した「赤色旅行」の促進政策において、雇用や旅行収入の拡大といった地元の経済支援対策の視点がとりわけ強調された。また、さまざまな団体が主催した愛國読書運動や愛國歌唱運動において、「科学を愛する」や「法律やルールを守る」といったテーマが多数取り入れられており、愛國心に対する多様な認識が見られる。詳細は次の拙稿を参照されたい。武小燕「中国における愛國主義教育の展開——改革開放政策下の変容と課題——」『比較教育学研究』日本比較教育学会, 第36号, 2008年1月, pp.25-44。
- (13)鄧正来『国家与社会：中国市民社会研究』北京大学出版社, 2008年。
- (14)「三つの代表」論では、共産党は中国の経済、文化および「最も広い範囲における人民の利益」を代表するものとされ、プロレタリアの代表者にとどまらないところに注目すべきである。また2002年に行われた党規約の修正については、「中国共産党は中国労働者階級の先鋒隊である」という規定に「中国人民と中華民族の先鋒隊でもある」という文言が追加され、入党資格も「18歳以上の中国の産業労働者, 農民, 軍人, 知識人とその他の革命分子」から「……その他の社会階層の先進分子」へと拡大された。それによって、新興資本家を含む社会のあらゆる人々の入党が可能となった。
- (15)現実には、たとえば私営企業家の入党は80年代末まで禁止されていたが、党規約の修正後、私営企業家における党員の割合が3割台にまで増えてきた。張厚義「中国私営企業主階層：成長過程中的政治参与」汝信・陸学芸・李培林監修『2008年中国社会形勢分析与予測』社会科学文献出版社, 2008年, pp.290-302。
- (16)中学校と高校の政治科の科目名は頻繁に変更されており、新中国成立から改革開放初期までは政治常識, 社会主義教育, 政治などと呼ばれ、必ずしも統一されていなかった。思想政治という科目名は80年代頃通称となり、90年代以降定着してきた。
- (17)「中共中央關於改革学校思想品德和政治理論課程教学的通知(1985年8月1日)」前掲『20世紀中国中小学課程標準・教学大綱匯編：思想政治卷』 pp.265-268。
- (18)改革開放期以降、階級闘争や革命を強調する左

傾路線への反省から、人間の価値と尊厳を主張する思潮が高まってきた。例えば、1980年代に文学界では『ああ、人間よ』（戴厚英『人啊人』）をはじめとし、文革を反省し、人間の尊厳を主張する文芸作品が多く登場してきた。言論界においてもマルクスの「経済学・哲学草稿」（1844年）への関心が集まり、その中で示されたヒューマニスティックな立場をもって人間の価値を軽んずる左傾路線を批判する動きが現れた。90年代以降、思想統制のいっそうの規制緩和につれ、ドグマチックなイデオロギー論または硬直化した科学主義から人間を解放し、人間の主体性や尊厳を求める思潮が次第に主流となり、2000年代に中共中央総書記の胡錦濤が「人間を本位とする」（「以人為本」）論を打ち出すに至った。こうした思潮の中で「人文性」、「人文精神」、「人文主義」などが主張されているが、人間への関心という共通の視線のほか、論者によってその主張や理解は必ずしも一律ではなかった。たとえば、個人主義・ニヒリズムへの批判と理想主義への追求という理解もあれば、金銭主義・功利主義または政治的な権威主義から人間の尊厳と知識人の良心を守るといった意見もあった。また、エリート意識の克服と庶民文化・大衆社会への尊重という主張もあれば、伝統文化の復権を唱える声もあった（文理平「關於『人文精神』討論総述（上）」『文芸理論与批評』1995年第3期，pp.119-134。同「關於『人文精神』討論総述（下）」『文芸理論与批評』1995年第4期，pp.123-138，p.14）。本稿では、学校教育で生じたドラマチックな政治志向から人間本位への転換を分析対象とするが、人間本位に関する言論界のより多様な議論を割愛することを断っておきたい。

- (19) 新中国以前、「公民」が中華民国の学校教育の科目として設けられ、近代的市民としての公民を育成する教育がなされていたが、本稿では中

華人民共和国の「政治科」における「公民」の取り扱いに限定する。

- (20) たとえば、2004年の高校政治科課程基準のなかでは、選挙、世論、自治などの意義と方法を語る「公民の政治的生活」のテーマが設けられており、中学校の教科書には国家機関とその公務員に対する批判や告発といった政治的権利も取り上げられている。『義務教育課程標準実験教科書 思想品德』（八年級下冊），人民教育出版社，2006年。
- (21) 李萍・鐘明華「公民教育——伝統徳育的歴史性転型」『教育研究』2002年第10期，pp.66-69。
- (22) 曾景忠「中国近代史基本線索討論述評」『近代史研究』1985年第5期，pp.164-189。
- (23) 羅の現代化論では、「現代化」という言葉を、資本主義的な意味を持つという社会主義的な認識から解放し、農業社会から工業社会に転換する歴史的な変化及び先進国を追いかけ、追い越す運動として定義し、脱イデオロギーの近代化運動を可能にした。費の中華民族多元一体論では、「中華民族は自覚を持つ民族の実体としては、100年来の中国と西洋列強の対立の中で現れたのだが、実在する民族の実体としては、数千年の歴史の中で形成されたものだ」と提起し、階級国家ではなく、中華民族をベースとする民族国家の可能性を示唆した。羅榮渠『現代化新論——世界与中国的現代化進程』（増訂版）商務印書館，2004年。費孝通「中華民族的多元一体格局」『北京大学学報（哲学社会科学版）』1989年第4期，pp.1-19。
- (24) 童頭勲「近年来中国近代化問題討論概述」『歴史教学』1994年第2期，pp.50-53。
- (25) 「新儒学」は、第一期の秦以前の儒学に対し、宋と明に新しい解釈が行われた第二期の儒学（「宋明新儒学」）および、五四運動後に現れた西洋化の主張に対して伝統文化の価値を主張する第三期の儒学（「現代新儒学」）を指す。今日

一般的に使用されている「新儒学」は、主に後者を意味する。現代新儒学は社会主義イデオロギーの新中国で排除されたが、改革開放以降、台湾や香港で続けられたその学説が大陸で紹介され、影響力を回復しつつある。方克立『現代新儒学与中国現代化』長春出版社、2008年。

- (26)孔子学院は、教育部が管轄する機構（「国家漢語国際推广領導小組弁公室」）の下で海外の大学などの教育機関と連携して設立する非営利的教育機関である。北京に本部を置き、2004年に韓国で第1校が設立されて以来、2011年8月末現在、世界で353校の孔子学院が設立された（http://www.hanban.edu.cn/hb/node_7446.htm 2011年10月10日閲覧）。「大国崛起」は、中央テレビによって作製され、2006年に放送された12回のシリーズ番組である。ポルトガルの海外進出以降先に発展を遂げた欧米や日本の9カ国の発達史を、従来の資本主義批判ではなく、近代化の視点から肯定的に捉える当番組のスタンスが、政府の代弁者とも言える中央テレビで打ち出されたのは初めてであり、社会で大きな反響を呼んだ。
- (27)中学校教科書『中国歴史』（一）～（四）の1981～1982年版と1992～1995年版の目録からページ数の割合を基に筆者が算出した。
- (28)『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』（八年級上冊）人民教育出版社、2006年、pp.104-110。
- (29)王淑英「グローバリゼーションと世界史教科書——中国・台湾・香港比較」渡邊雅子編著『叙述のスタイルと歴史教育』三元社、2003年、pp.188-215。
- (30)次の教科書を参照。『初級中学課本 中国歴史』（第一冊・第三冊・第四冊）人民教育出版社、1981年・1981年・1982年。『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史』（第一冊・第三冊・第四冊）人民教育出版社、1992年・1994

年・1995年。『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』（七年級上冊・八年級上冊）人民教育出版社、2006年・2006年。

- (31)『義務教育課程標準実験教科書 中国歴史』（八年級上冊）四川教育出版社、2003年。
- (32)国語教育の教科は、中華民国期に「国語」（小学校）と「国文」（中学・高校）と呼ばれていたが、1949年に中華人民共和国成立後、話し言葉（「語」）と書き言葉（「文」）の両方とも重視する趣旨から「語文」に統一された。その趣旨は次の文献を参照されたい。劉增人・馮光廉編『葉聖陶研究資料』北京十月文芸出版社、1988年、p.229。
- (33)陳鐘梁「是人文主義，還是科学主義？——語文教學的哲學思考」『語文學習』1987年第8期，pp.2-4，p.56。
- (34)韓軍「限制科学主義 張揚人文精神——關於中国現代語文教學的思考」『語文學習』1993年第1期，pp.12-15。
- (35)注(18)を参照されたい。
- (36)「世紀觀察・憂思中国語文教育」（雛静之「女兒的作業」王麗「中学語文教學手記」薛毅「文學教育的悲哀——一次演講」）『北京文學』1997年第11期，pp.4-17。
- (37)陳群「理想的階梯」『義務教育三年制初級中学教科書 語文』（第四冊）人民教育出版社、1991年，pp.127-132。陶鑄「崇高的理想」『高級中学課本 語文』（第二冊）人民教育出版社、1995年，pp.141-151。
- (38)流沙河「理想」『義務教育課程標準実験教科書 語文』（七年級上冊）人民教育出版社、2001年，pp.26-29。
- (39)趙志研「梁啓超：提出『中華民族』概念第一人」『中国民族報』2009年1月16日。
- (40)魏芳「我国語文教材中外国文学作品的嬗变」『沙洋師範高等專科學校學報』2004年第6期，pp.39-41。